

2015年度教師海外研修(エルサル) 研修報告書

学校名	愛知県立一色高等学校	氏名	鈴木 理恵
-----	------------	----	-------

1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

今回この研修の参加の目的が3つあった。①目、耳を使い五感で現地を感じ、エルサルバドルの人と交流すること。②エルサルバドルと日本の繋がりをみつけること。③エルサルバドルで働く日本人の話を聞き様々な仕事があることを日本の生徒に伝えること。①については、訪問した学校の生徒達や、ホームステイの家族と身振りを交えながら話し、子供たちの元気な笑顔や家族を大切に思う心は日本と変わらないと感じた。②については、車、電化製品など品質の良さで知られている日本製品やアニメが目に入ったが、本当の繋がりは、青年海外協力隊やシニア海外ボランティアの方が、学校や市役所、農園などで現地の人の中に入り溶け込んでいることだった。③については、そのような日本人が、無くてはならない存在になっていること。現地での青年海外協力隊の活動を見ていくにつれ、中米統合機構(SICA)広域アドバイザー米崎さんの「国際協力も最後は人です」と言う言葉が確信に変わった。

今後この貴重な経験を日本の生徒達に肯定的に伝え、エルサルバドルを身近に感じてもらい、青年海外協力隊の姿を通して海外に目を向ける教材作りをしていきたい。

2. 訪問国から学んだこと(気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

中米大学で耐震について学んでいる現地の大学生に日本の印象を聞いた時「技術が進んでいて、一度は行ってみたいあこがれの国」と答えた。好きなアニメは「悟空(ドラゴンボール)で、大学内では日本のコスプレ大会にも参加した」という彼は、少し恥ずかしそうにはっぴ姿の写真を携帯で見せてくれた。中米で最も親日的といわれる国エルサルバドルを実感した瞬間だった。コーヒー農園(Procafe)を訪問したとき、コーヒー園で蚊を追いかけて聞かれた様々なコーヒー品種の木。品種開発の研究室でも一つ質問すると、時間を忘れてどの人も熱心に答えてくれた。(何故かいつも時間が押してしまったけれど) 親切な人柄でもあるが、それ以上に人と話すのが大好きな人なつっこい人々の存在がこの国を象徴していると、あちこちで感じた。ロロティケの小学校の日本紹介の授業で、竹とんぼをしたときのこと。子供達も大喜びであったが、なんと校長先生や、警護の警察官まで竹とんぼ遊びに興じ何度も何度も飛ばしていた姿は今でもほほえましく思い出される。

「人」がキーワードのエルサルバドルであった。

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

日本にいるときは、遠いエルサルバドルに日本とどのような繋がりがあのか全くわからなかったが、現地に着くと、看板や道路を走っている車などの日本製品が最初に目に入った。到着した時に利用した国際空港が日本の支援で作られたと聞き、国のインフラにも日本の協力があると知った。しかし、何日か経ち何人かの青年海外協力隊の話を聞くにつれて、本当の繋がりは人や考え方ではないかと思うようになった。青年海外協力隊のいるいくつかの学校を訪問したとき「ゴミを拾う」「整理整頓」「時間割を守る」「授業規律」などの基本的な考え方を共有することから始めていた。日本では当たり前だと思われていることには、実は意味があり、意

識していないが教育システムとして大切な考え方だと改めて気づいた。また、訪れた小学校などの子供達の元気な笑顔はエルサルバドルでも日本でも同じであるし、おしゃれに興味がある女子高生もまた同じであると思った。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

エルサルバドル人はなぜ「家族が一番大切なもの」と答えるのだろうか。その価値観はどこからくるのか。日本でも親が子供を愛する気持ちは同じであるが、ここでは子供か親、祖父母、親族を思う気持ちの強さは日本の比ではない。夕食時のレストランでウエーターのアルバイトをしている18歳の男性ですら、「大切なのは家族」「母に会いたい」と言う。家族や親戚の人々に囲まれて過ごしたいために、遠方の大学でも自宅から通う大学生。コミュニティーを大切にし、誕生日を親族で祝う家族の結びつきを大切にしている人々。この価値観は、日本でもかつて大切にしてきた価値観であったが、現在は個人の生活を尊重する傾向がある。この国にカトリック教徒が多いのも、価値観に大きな影響を与えているが、内戦で多くの命を失ったことが、より結びつきを強くしているのかもしれない。ここエルサルバドルでも若い人たちは内戦の経験がない。「戦争の経験を若い世代にどう伝えていくか」日本人にとっても忘れてはいけない問いであると思う。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

耐震（現地でも「TAISHIN」という日本語が使われている）の低所得者用住宅建築について、強度を計測する技術は日本のものだが、日本で使っている資材をエルサルバドルでそのまま使うのではなく、現地の日干し煉瓦を使いながら、耐震強度を高める構造を開発したこと。絵入りのパンフレットを作成し普及した点が「良い!」と思った。現地の人が、現地にあるものを利用し、改善していく考え方がその地に根付いていることを実感した。移動中に、建築中の耐震住宅を見かけ、耐震の技術が浸透していると感じた。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

※別掲

5. 印象に残る写真2点とその解説

●写真1… [BAN_4180]

◇キャプション：習字を書いたよ

◇解説文：ロロティケ市の小学校で書道の授業。最初は私達が名前を聞いて書いていたけれど、途中から子どもたち自身で名前や好きな漢字を書いた。何度も何度も列に並んで書いていた姿はかわいかった。



●写真2… [FUC_1721]

◇キャプション：JICA の車を護衛中の警察官

◇解説文：現地の市内各地に、治安維持のための警察官が銃を持って警備していた。私達 JICA の車も常時警察官が先導していた。殺人率世界ワースト1の治安状況を表す写真。



6. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

体調管理は本当に大切で、帰国直前に体調を崩したので焦った。原因の一つに、冷房が日本より強くその変化に対応できなかったことが考えられる。ホテルなどの室内は、冷房が強く一枚余分に羽織るものをこまめに着ることが大切だと感じた。持ち物は、重量制限があるので、なるべくコンパクトにまとめていく必要があると思った。また、帰りに荷物が増えるので、チャック付ポストンバックを1つ入れておくと良いと思う。現地の移動中に仲間と見学後話をすると、新たな視点に気づくことができ良かったと思う。携帯用のしわ伸ばしスプレーは少しの皺なら一晩で伸ばすことができ便利だった。現地への大きなお土産では、大使館などに使われることもあるので、名古屋のいろいろなど品の良いものを用意しておくと思礼にならないと思う。反省点として、教材班ごとに、どの訪問先で、どのようなタイミングでお話を聞き、現地の子供達と交流できるかを前の日までに改めて共有しておけば良かったと思った。当初の予定外で交流時間をもらえてもアンケートの用意を持参してなかったりしたので、見通しを持っておくべきだと感じている。出し物（歌）などは移動のバス中で練習時間を取ることで、うまく練習時間が確保できたと思う。全体を通して、チームメンバーの協力や通訳さんの助言が有り難かった。

7. その他全般を通じての感想・意見など

JICA や NIED の方には、メンバー全員に体調等を常に気遣っていて本当に感謝している。また、私達の移動の際、常に現地の警察が帯同するなど安全面で現地のバックアップも厚く、多くの人々のお陰でこの研修ができていて感じている。サンミゲルでシニア海外ボランティアの方とお話しする機会をいただけたのもうれしかった。現地での生活や活動の内容について食事をしながら話すことができ、いろいろ参考になった。

終わって振り返ってみると、約2週間の研修が全体像を最初に把握し、各地で隊員の各活動を見ることができるようになっているとわかる。現地にいるときは、その日その日の研修で追われていて気づけなかったが。今回のエルサルバドルの日程は1学期終業式直後に出発だったので、準備期間に余裕がなかった。可能なら出発を2日ほど繰り下げてもらえると多少余裕ができると思う。日程的には忙しいが、どの訪問先も新たな発見が有り、内容の濃い2週間であった。他では学ぶことのできない出会いと経験をさせていただいたと思う。

以上